
ASCENDANT PRELUDE -tail-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ASCENDANT PRELUDE - t a i l -

【Nコード】

N0122U

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

リユケイオンで軍神アレスの居城に囚われたアレイ。眼前に迫った武道大会で軍神アレスと真剣勝負し、勝てば城から解放してもらうことを約束する。そんな中、城下町ミルメクスで異国の歌劇団が人気を集めているという噂が流れてきて アレイは無事ラックと再会し、共に海を越えることができるのか？ LOST COIN シリーズ第二幕放浪編、第二部です

・・・ハジマリ・・・(前書き)

この作品は「LOST COIN」シリーズの「第二幕・放浪編
第二部」にあたります。

ここから読み始める事もできますが、もしよろしければ「第一幕・
滅亡編」からどうぞ。

「LOST COIN」シリーズまとめページ

<http://sky.geocities.jp/lostcoin/lostcoin.htm>

ブログ「また、あした。」

<http://lostcoin.blog.shinobi.jp/>
p/

かつてこの大陸には、悪魔たちを崇拜する王国があった。

悪魔が護る王国、グリモワール。

グリモワール王国独立戦争の折、後の初代国王ユダ「ダビデ」グリモワールとその親友で稀代の天文学者であったゲーティア「グリフィス」は、天使たちに護られるセフィロト国の神官に対抗するため、魔界から悪魔を召喚し、闘った。

十数年に及ぶ戦の末、グリモワール王国は独立を勝ち取った。

そして建国後ほどなく、初代ダビデ王と稀代の天文学者ゲーティア「グリフィス」は、72の悪魔と契約を結び、それぞれ72のコインを作り上げた。ダビデ王は72人の天文学者一人一人にそのコインを与え、天文学者たちは人知を越えた悪魔の力を使役してグリモワール王国の祖を築き上げた。

「悪魔の王国の誕生だった。

さらに、王国の祖となるダビデ王、稀代の天文学者ゲーティア「グリフィス」の二人と並び称される女性騎士がいる。

名はレティシア「クロウリー」。

戦の悪魔マルコシアスを使役した彼女は、王国最強の炎妖玉騎士団を率い、北と西の国境線を引いた。

女性騎士レティシア「クロウリー」が土地を、初代国王ユダ「ダビデ」グリモワールが治世を、稀代の天文学者ゲーティア「グリフィス」が悪魔の力を、それぞれが創り出した力をもとに、グリモワール王国は繁栄の時を迎えた。

しかし、建国より長きが経過した今、グリモワール王国はもう存在しない。

4年前に勃発したセフィロト国とグリモワール王国の凄惨な戦の結果、グリモワール王国はディアブル大陸から姿を消したのだ。セ

フィロト国は、ここぞとばかりに悪魔崇拜を弾圧した。

だが、長年信仰してきたものをおいそれと捨てられるわけもない。グリモワール王国国民だった人々は、天使崇拜が強要される中で、ひっそりと悪魔を崇め続けた。例えばフィロト国の厳しい禁止令が縛るうと、人々は諦めなかった。

そして、王国の滅亡を生き延びた最期の王子は、そんな多くの人の心を知り、グリモワール王国再建を誓ったのだ。

さらに、グリモワール滅亡後に遺されたのは、初代国王ユダ・ダビデ・グリモワールの時代から脈々と受け継がれてきた王家の血と、悪魔崇拜の心だけではない。

ゲーティア・グリフィスが創り上げたコインはいまも多くが残されており、その血脈は一人の少女の中で生きている。少女は、かつて始祖がそうしたように多くの悪魔と契約し、さらには最強の悪魔を内に秘めていた。

また、建国に多大な貢献をした女性騎士レティシア・クロウリーも悪魔の血を残している。生涯を剣の道に捧げ、一人身を通じた彼女は人の子はもうけなかつたが、悪魔と交わり、子を成していた。

建国から500年たった今も、レティシア・クロウリーの子孫である俺の中には悪魔の血が生きている。悪魔の力が隠されている。ふとしたことで現世界に具現化するそれは、俺を息子と呼ぶ悪魔から分け与えられたものだった。

かつて自分たちの先祖がそうしたように、レティシア・クロウリーの子孫である俺と、グリフィスの末裔である少女は最期の王子に絶対の忠誠を誓った。

セフィロトとグリモワール。

天使と悪魔。

相対するモノが互いを消しあおうとするのは道理だ。近縁種は反

発する　それは、はるか太古に世界が定めた『^{「トワシ}理』。

天使は悪魔を嫌悪し、悪魔は天使を憎悪し、拳句、世界は完全なる欠片を創り出した

まるで一つの魂を二つに割ったように、容姿の似通った天使と悪魔の対がある。『片割れ』と呼ばれるそれらは、互いを滅ぼしあう運命にあった。

俺の中に悪魔の力を遺した悪魔は、名をマルコシアスという。彼は俺の使役する悪魔であり、父であり、師匠だった。

悪魔の角を持ちながら、背に純白の翼を湛え、頭上に金冠を戴くマルコシアスは墮天の悪魔　少女の中に巣くう最強の悪魔と共に天界から魔界へと下った元天使。

マルコシアスと対を成すのは、殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラス　闇色の毛並みと血のような炎妖玉ガイネットの瞳を持つ、鋭利な牙の殺戮者。

マルコシアスとグラシャ・ラボラスは天使と悪魔の片割れ同士、互いを滅ぼし合う運命にある。

グラシャ・ラボラスと契約したのは、稀代の天文学者ゲーティア
「グリフィスの末裔に当たる少女だった。」

互いに滅ぼし合う運命にある二つの魂は、俺と少女の中に分かれた。

いつかきつと、マルコシアスとグラシャ・ラボラスは争うことになるのだろう。どちらかの消滅だけが平衡の安息であると分かっているから。

逃れ得ぬ道、その先に待つのが敵対だとしたら、俺はいつだってうすればよいのだろう。

もしあいつが剣を差し向けてきたら、その切っ先に俺は自らの喉を差し出してしまうかもしれないというのに。

それでも、マルコシアスを失くしたくない気持ちも本当だった。だから、きつと、俺は

ぴんと張り詰めた空気が周囲を取り巻いている。

まだ怪我が治りきっていない左手ではなく、右手に練習用の剣を手をしているせいで、どうしても違和感が拭えないのはこの際我慢しよう。この怪我はすべて自分の所為だ。

その代わり、一度折れてしまった右足はアフロディテの治療のおかげで回復していたし、芥子の禁断症状が襲ってくる感覚も、揺り返しもかなり頻度が低くなっていた。

こうして、軍神アレスを相手に稽古をするほどに。

朝の稽古を再開してもいいという医師アーデインの許可が出た時、かなりほっとした。

これまでずっと習慣にしてきた朝稽古を再開できると言うだけで気持ちが違う。

相手と見合ったこの間だけに感じ取れる、『何か』を共有していると勘違いしてしまいそうになる瞬間はとても心地いい。

命のやり取りをするような戦いの中に在る人生を願ったことなど一度もないが、こうして対峙するのは好きだった。

軍神アレスは両手でしっかりと柄を握り、正眼に構えている。隙のない構えだった。

足運びから、見た目通りの東方の剣術を学んでいることが分かる。手にしたのは直刃の木刀だが、切っ先の位置から反った片刃の刀剣を使うことなどすぐにわかる。

それも、相当な鍛錬を積んでいる。

どちらかが髪の毛一本分でも切つ先を動かせば破られる静寂。先に動いたのは俺の方だ。

何の小細工もなく、真つ直ぐに、ただ剣を突き出した。

東方の剣は細く、弧を描いた切れ味鋭い薄い片刃が特徴だ。大陸西岸で主に使われる両刃の大剣を手にしたときのように力任せに剣を受けるようなことはせず、足運びと重心移動で『避ける』事を得意とする。

軍神アレスも例にもれず、俺の剣先を見きり、流れるような動きで静かにかわした。

まるで残像でも残りそうなその動きにぞくりとする。

間髪いれず剣を握る手元を狙ってきた剣先を避けるように右手を引きこみ、逆手で薙ぐ。

が、腕が伸びきる前に肘を抑えられた。

一瞬にして再接近戦に持ち込んだ軍神アレスは、刃のない剣を俺の喉元に突き付けてきた。

意識より先に体が反応する。

軸足に一瞬力を入れ、瞬間、飛び退った。

無理な動きでバランスを崩しそうになるが、両足でしっかりと地面を掴む。

右足が、ほんの少しだけ痛んだ。

完全回復とはいかないらしい。

「無理な動きはするんじゃねえよ」

タイミング良く医者アーデンが釘を刺した。

危うく左手に持ち替えそうになっていた剣を、右手で握り直した。無表情の軍神アレスも再び正眼に構え、間合いをとった。

SECT・1 演武

稽古を終えたところで、これも恒例となった医師の診察が待っていた。

この城の筆頭医師であるというアーディンという青年はくわえ煙草に薄汚れた白衣、無精ひげというとても医者には見えない風体だが、どうやら腕は確からしい。

何より、詳しい事情は分からないが、俺が悪魔の血を引くように、こいつは天使の血を継いでいるようだった。特別隠してはいないらしく、探查能力に欠けた俺でも目の前にいれば天使の気配がする程度にその気配は垂れ流した。

そのことをわざわざ口にしたりはしないが、こいつも俺が気づいていることに気付いているはずなのだが……この男は何も言わない。「今朝の稽古はやり過ぎだ。治んのが遅くなっても知らねえぜ?」

返答せずにいると、青年医師アーディンはくっく、と笑った。

「まるで子供だな、アンタは」
「煩い」

答えてから、この返答こそ子供じゃないかと自分が嫌になる。

アーディンの後ろに控えていた金髪の少女がくすくすと笑った。

そうやって美しく波打つ金髪を揺らして笑うのはオリュンポスの一人、美神アフロディテであるポーズポア。エウカリス。ポピーという名で呼ばれている。

綻んだ口元に手を添えながらポピーは肩を竦めた。

「失礼、クロウリー伯爵」
謝られている気が全くしない。

ため息でもって返すと、さらにくすくすと笑い声が響いた。

「だが、随分な速度で回復してんなあ。アフロディテの加護があったとはいえ……流石は悪魔の国の騎士サマだ」

最後に左手を分断する傷の治りを確認し、アーデインは席を立つた。

「武道大会までには完治するだろうよ。おい、大会には出んのか？」
ミュルメクスの武道大会。

噂には聞いている。

毎年この時期、リユケイオンのみならず、ディアブル大陸全土から屈強な戦士が集結し、強さを競う武道大会がこの軍神アレスの居城で行われる。過去には漆黒星騎士団ブラックルビーや炎妖玉騎士団ガーネットからも生え抜きの騎士が参加していたこともある伝統深き大会だ。

大会は約1週間にわたって行われ、参加者だけでなく応援や見学の観光の人々もかなりの数が訪れ、町全体がお祭り騒ぎで盛り上がる一大イベントだ。

何より、自分の腕を試すまたとない機会。

興味がないはずがない。

「機会があれば出場してみたいとは思っている」

そう言うと、甲高い少女の声が分断した。

「させるわけがないだろう」

声に振り替えると、そこに立っていたのは目の覚めるような赤髪の少女だった。高い位置で二つに髪をくくり、それに負けず鮮やかな紅のセパレートに身を包んだ彼女は、ミリアリユコス「エリュトロン」。軍神アレスの居城を我が物顔で闊歩する彼女が何者なのか、俺はよく知らない。

彼女はいつもその背後に東方部族の長身男性を従えていた。左側だけ伸ばした髪を三つ編みにした堂々たる体躯の男は軍神アレス。軍神の名にふさわしい腕の持ち主だが、これまで俺はこの男の声を聞いたことがない。

「お前のような有名人を大会に出すわけにはいかない。面倒だからな。少しは自分の名の影響力を知ったほうがいいぞ、悪魔騎士アレイスター「クロウリー」

「……まるでお前が主催する大会かのような言い方をするんだな」

そういうと、問答無用で睨みつけられた。

「やめなよ、ミリア」

ポピーがほんの少し敵しめの声でたしなめる。

「そろそろクロウリー伯爵をこの城から解放するんだ。もう芥子の禁断症状もかなり治まったし、何より、グリフィス女爵が探しているかもしれないだろう?」

グリフィス女爵、という名にどきりとした。

死なないで

第27番目の悪魔ロノウエが伝えたメッセージが蘇り、思わず左手の傷を見た。左手を切り落とす寸前まで深く傷つけたこの掌を見て、あいつはまた泣くんだろうか。それとも、生きていてよかったと泣くんだろうか。

どちらにしても泣かせることに変わりなく、それよりなにより、今すぐにでもあいつに会いたかった。

「駄目だ。こいつはここに置いておく」

「何言ってるの。もうやめなって言ったでしょ?」

「嫌だ。アレスもこいつも、私のモノだ」

「ミリア!」

まるで子供を叱る母親のような語気で叫んだポピーは、はっと気づいて軽く会釈した。すみません、と小さく声を添えて。

肩を竦めたアーデインがテンポよく二人の頭を叩いた。

「そんなくらいにしとけ、オリュンポスのガキども」

「誰がガキだつ……!!」

部屋を出ていくアーデインの背中に向かってミリアが吠えたが、彼はそれを無視して出て行った。

罵詈雑言を扉に向かってわめき散らす赤髪の少女のことはさておき、どうすべきかと考えを巡らせる。

リュケイオンに入ってから幾日立つかしれないが、未だ俺にはあいつの手がかりひとつ入ってこない。捕えられたという話があればきつとポピーが黙ってはいないだろうから、セフィロトの手には墮

ちていないと見ていいだろう。

そうすると、あいつは今、いったいどこにいる？

こういう時、自分の探査能力のなさのため息が出る。千里眼を操ることのできるあいつなら、いくら遠くても見つけ出してしまおうだろう。

と、俺はそこまで考えて、ようやく答えを導き出した。

「……そうか」

呟き、かすかに笑んだ俺を見て、ポピーが首を傾げる。

「どうなさいました？ クロウリー伯爵」

「いや、えらく簡単な事を忘れていたなものだと思つてな」

進む方向を示してやるだけ。

ただそれだけでいい。簡単な事だ。

そもそも、俺自身が迎えに行くなんて言う過保護な姿勢を取ったことなどこれまで一度もなかったのだ。レメゲトンになるときも、戦争の時も、難攻不落のディファンククス牢獄を破ったときだって、あいつは自分で決断し、自分で道を決めて、まっすぐに歩いていった。俺がわざわざ迎えに行くまでもなく、あいつはいつも自分で道を切り拓く力を持っているのだから。

「ミリア」

俺は、扉に向かって悪口雑言を振りまく少女を呼んだ。

ミリアは赤髪を揺らして振り向き、きつと俺を睨みつける。

「なんだ、アレイスター」クローリー」

「お前は俺をこの城から出す気がないようだが、それは本当か？」

叫びかけたポピーを制止し、俺はまっすぐにミリアを見据えた。

「勿論だ。私はお前を手放す気などさらさらない」

自分がこの少女のモノになったつもりなど微塵もないのだが、それはさておき。

俺は床に膝をつき、二人の少女に対して頭を垂れた。

「セフィロト国の手から守ってもらったことは感謝している。負つた怪我も完治した。俺一人ならば野垂れ死んでいただろう。心から

感謝する」

「面を上げてください、クロウリー伯爵。貴方を助けたのはあくまで政治上の理由によるもの。お心を砕くようなことではございません」

淡々とポピーが返した。

無論、俺がここにいることもポピーが俺を治療したことも、単純な政治上の理由だけでないことは分かっている。が、建前としてそう言わざるを得ないのだろう。

「だが、俺にも帰るべき場所がある。いつまでもこの場所にとどまるわけにはいかない。だとすれば、俺はここから力づくで出ればいいのか？」

「力づく？ は、やってみる。私の結界とアレスを超えられるわけがなかるう」

「試してみるか？」

大きく傷痕の残る左手を握り、俺はミリアを挑発した。

「もしここから本気で出ようと思ったら、手加減はしない。お前と軍神アレスは無事でも、街と城はそうもいかんだろうな。それとも癒しに秀でたアフロディテが護りにも長けているというなら話は別だが」

どうやら俺の意図をくみ取ったのか、ポピーはくすりと笑って首を横に振った。

「残念ながら僕の力は攻撃から身を守ることに向いてない。それが得意なのは、軍神アレスの力だよ」

軍神アレス　あの赤髪の男はあれだけの戦闘力を持ちながら、さらに守りの力までも持つというのか。

厄介な相手だ。

だが

「俺とて無差別の破壊が目的ではない。だが、このままここには留まれない。そこでだ、ミリア。取り決めをしようじゃないか」

だからこそ、交渉材料にもなる。

「取り決め？ いったい何を？」

ミリアの眉が跳ねる。

「無為に戦えば周囲を巻き込みかねん。だから、規則の中で、正々堂々と勝負して決める」

「規則の中で勝負だと？」

一瞬怪訝な顔をしたミリアだったが、すぐに納得したのかにいと笑った。

「武道大会」

「そうだ。観客の前で正々堂々と戦って決めれば、文句はあるまい」「いいだろう。アレスと戦い、勝てばお前をここから解放してやる」自信たっぷりと言い放ったミリアは、軍神アレスの勝利を確信しているのだろう。

それはとてもよくわかる。あの無口な男は実際、武道大会に出場すれば優勝も狙えるだろう程の手練れであることは俺もよくわかっている。

「まってミリア、さすがにアレスは大会に出られないよ？」

ポピーが慌てて止める。

「大丈夫だ。私が舞台を用意してやろう。神前舞踏の後に、演武の席を設けてやる。軍神アレスと悪魔騎士の演武だ。これで文句はないだろう？」

ミリアの考えは分かっている。

この少女は、俺をどうにかして軍神アレスの下についたと思わせたいのだ。それが、虚栄心から来るものか、ただの支配欲から来るものかはわからないが。

だとすれば、演武で軍神アレスが悪魔騎士アレイスター「クロウリー」を打ち負かすのが早道。

軍神アレスのほうが各上であることが大陸全土に知れ渡ることだろう。

「ない。後になって逃げるなよ、ミリア」

「それはこちらの台詞だ、アレイスター「クロウリー」」

これでいい。これでミリアは演武のことを大々的に宣伝する。

この地を治める軍神アレスと、先日セフィロト国の追手を派手にひきつれて亡命した悪魔騎士アレイスター・クロウリーの演武なのだから、確実に人々の話題になるはず。

そしてきつと、いつかあいつの耳にも

あいつに会うために俺がやるべきは、この城を出て迎えに行くことじゃない。

ここに俺がいることを、わかりやすく教えてやることだ。

そのためなら俺は、セフィロト国の追手も恐れず、この名を知らしめてやるぞ。

SECT・2 懺悔

芥子を身内に取り込んでから、息苦しさで目覚めることが多々ある。

今夜もそれだった。

動いていないと気分が悪いので、宛がわれた部屋を抜け出した。しんみりとした空気が廊下を満たしている。まっすぐに見える廊下の先が見えないのは、微かに湾曲しているせいだろう。最初からこの中にいた俺は、この居城の形をよく知らない。

が、グリモワール王国時代のかすかな記憶では、軍神アレスの居城は円形のコロッセオだったと思う。

だとすれば、この廊下を一周すればまたこの場所に戻るだろうか。この城は、グリモワール王都ユダのジュテツカ城と違い、人気がない。この城を維持するだけでもかなりの人員を割くと思うのだが、軍神アレスとミリア、それからポピーと医師のアーディン以外、ほとんど人の姿を見かけない。

以前、そのことをちらりと聞くと、ポピーは階層が違うのですよ、と言っていた。下の階層には常駐する騎士団員や政務に関わる人々がいるらしい。

そしてそのさらに下は、闘技場になっているのだという。なんとも不思議な構造だ。

ずいぶん歩いても同じ景色しか見えないし、下る階段も上る階段も、そもそも窓の一つも見当たらない。

「目印でもつけておくべきだったか」
要するに、戻れない。

戻るべきか進むべきか決めあぐねていると、人が近づいてくる気配がした。

よく見れば少し湾曲している廊下の向こうから、灯りが見える。この場内で敵とは考えにくい。腰の剣からは手を離し、しばらく

待つと、向こうから現れたのは金髪のオリュン波斯だった。

「クロウリー伯爵。どうなさいましたか……眠れませんでしたか？」
柔らかな笑みをたたえたポピーに、迷子になったとも言えず。

「……ああ」

ただ肯定した。

眠れなかったのは事実だ。

ポピーはただニコリと笑って、灯りを掲げた。

「ちょうど僕も眠れなかったところなんです。部屋で暖かい香茶しゅうちやでもいかがですか」

ポピーは俺が迷子だったことに気付いているのかいないのか、何も言わずとも俺の部屋の前まで案内すると、少し待っていてください、と自分は外に出た。

しばらく待っていると、湯気の立つポットとカップを二つ、盆に載せて戻ってきた。

部屋に備え付けてあるソファの前の硝子机の上に置くと、慣れた手つきでカップに香ばしい液体を注いだ。

この国に来てからよく飲む、『香茶しゅうちや』と呼ばれるそれは、『紅茶』とはまた少し違い、名前通り非常に香ばしいのが特徴だった。

どうぞ、と差し出されたカップを手に取ると、隣に座っていたポピーはにこりと笑って俺の方々にじり寄った。

わざとなのか、挑発するように俺を上目づかいに見上げながら。

「無防備ですね、こんな夜更けに女性を部屋に招くなんて、あらぬ誤解を招きますよ？」

「は？」

思わぬ言葉に、それこそ無防備な声が出た。

「何を言っている、ポピー。お前は男だろう」

当たり前のようにそう言い返すと、ポピーは柔らかな金色の髪を揺らして驚いた顔をした。

が、それは一瞬で。

すぐにいつものようにくすくすと笑った。

「何だ、気づいてらしたんですか」

「最初は騙された……が、俺を支えた力が女のものとは思えなかったからな」

他にも気づく要素はあったが、口にするのは野暮だろう。

ポピーは笑みをたたえたまま、静かに告げた。

「隠しているわけじゃないですよ。勘違いしている方の方が多いですけど。いずれにせよ、美神アフロディテは女性だというイメージが強いですから、この格好の方が都合のいいことが多いんです。特に、軍神アレスと美神アフロディテは領地が隣り合っていることもあって式典でも並ぶことが多いですし、領地はほとんど一緒に治めているようなものです。僕が長くここに滞在していられるのもそのためです。だから、軍神アレスと美神アフロディテは対である必要がある」

一瞬だけ素顔に戻ったポピーは、冷たい光を瞳に灯した。

まるで、何かを決意するかのように。

「軍神アレスの隣に立つのが金髪の男では格好がつかない、とでも言うのか？」

「こつこつという職業は、内面以上に見た目が重要なのは貴方もご存知でしょう。悪魔騎士と呼ばれた貴方ならその容姿が後押しになりこそすれ、疎ましいと思ったことなどないでしょう？」

そついわれてしまったては、返す言葉がない。

戦場に映える自分の容姿に感謝したことすらある俺がどうこつこつ言えるものではない。

「だからミリアは、アレスや貴方を手元に置きたがるんです。自分にはないものを持つ貴方に憧憬を抱いている」

「……まるでミリア自身が軍神アレスであるかのような言い方をするんだな」

勘ぐってそうだったが、笑顔で誤魔化されてしまった。

ポピーは香茶を口にし、肩の力を抜いた。

「そして何より、アレスは　彼女の父親にとてもよく似ています」
カップの中の水面に誰かの面影を映すように、ポピーは視線を伏せた。

「ミリアの父親？」

「ええ。3年前、東の戦禍に巻き込まれて亡くなった、先代軍神アレスです」

「……！」

思わず息をのんだ。

確かに東方にはセフィロト国やリユケイオンのような大国はなく、小さな国の集合体で、常に小競り合いを繰り返しているが。

リユケイオンが東の戦いに手を出し、さらにはオリュンポスを一人失うような事態になっているなど、初めて聞いた。

「国際社会にほぼ口を出さぬリユケイオンが東の戦いに軍神アレスを派遣するとは、いったい何があったんだ？」

「東の戦への出兵に関して、詳しい理由は様々ありますが、あまりに国境近くだったというのが大きな理由です。リユケイオンの領土に飛び火しかねなかった。国土の自衛は主に、軍神であるアレスの役目でしたから」

悲しげに微笑むポピーも、先代軍神アレスを慕っていたのだろう。一息ついて、ポピーは話を続けた。

「今のアレスは、その戦で瀕死の重傷を負っていたため、僕は治癒するために戦場に呼ばれました　でも、結果は貴方と同じです、クロウリー伯爵。父親を亡くし、新たな拠り所を求めたミリアは、彼を芥子の毒で縛り付けてしまった」

「そして、今に至る……か」

ポピーは空になったカップをテーブルに戻した。

「クロウリー伯爵、僕はもうミリアに辞めさせたいんです」

泣きそうな声を絞り出したポピーは、ようやく年相応の少年に見えた。

ミリアもポピーも、大人びている。二人とも十代半ば過ぎだろうに、オリュンポスの責務を負っていることは紛れもない事実だ。ポピーははつきりと告げたりはしないが、ミリアが現在の軍神アレスであることは間違いない。

3年前にすでに美神アフロディテであったポピー。

軍神アレスの領地と美神アフロディテの領地がほぼ同一に治められている、という事実があるならば納得できる。経験を積んだミリアの父親がいれば、年若いポピーでも少しずつ債務を覚えていくことができただろう。

しかし、3年前に事故は起きた。

先代の軍神アレスはなくなり、幼いミリアがその職を継いだ。

そして、未熟なオリュンポスが二人、残された。

幼いなりに二人は悩んだのだろう。自分がオリュンポスとしてどう行動すべきか、考えに考えた結果が、この姿だった。

ミリアは赤髪の男を軍神アレスとし、ポピーは女性のような姿になった。

その時にいったいどういう公表がなされたのかはわからないが、国民は本物の軍神アレスはあの東方民族の赤髪の男だと思っており、ポピーの事は少女だと信じているようだ。

そうして話がこじれたまま3年経った、と。

これでようやく、この城の人物の素性が知れた。

隣で俯いたポピーの頭に、ぽん、と手を乗せた。

よく悩んでいるくそガキに対してそうしてやるように。

「お前がそう思うなら、俺もできる限りで助力しよう」

はっとポピーが俺を見上げた。

みるみる顔がくしゃくしゃになって、見られないようにと両手で顔を覆った。その仕草はまるで女性のようで、なんとなく不思議な気はしたが、そのまま頭を撫で続けた。

「お前、いくつだ？」

「……17……次の誕生日が来たら、18です」

「まだガキだな」

そういうと、ポピーは途切れ途切れに、クローリー伯爵には言われたくありません、と生意気なことを告げた。

しかしながら、オリュンポスになったのは15の時。俺なら騎士団に入りたての頃だ。放り出されるにはまだ早すぎる年齢だろう。

「他のオリュンポスはこれを知っているのか？」

「分かりません。ゼウス様はご存知かも。ここは国境で、あまり他のオリュンポスと交流がありません。それが幸いしたのか、不幸だったのか、皆、あまり知らないと思います」

「城の皆知っているのか？」

「知っている者と知らない者が……前軍神アレスの時代から仕えている方たちはご存知です。何もおっしゃいませんが、きっと僕たちに落胆している」

SECT・3 異国ノ歌劇団

居住区を分けたのは、そのためか。

人気のない城の理由をようやく理解した。

「ずっとこのままでいられるはずありません。いつかは発露するでしょう。その時、ミアアがどれだけ傷つくかと思ったら、僕は居ても立っても居られないんです」

震える声は、ただ少女が傷つくことを厭う少年のものだった。

柔らかな人当たりも、優しい雰囲気もすべて、周囲から自分とあの子を守るための防壁で。重ねた嘘を塗り固めてきたのだろう。

「どうしよう……僕はいつたいたいどうしたらいいんでしょう？ 僕もミアアも、オリュンポス失格です。皆きつと、とうに僕らの事など見限っている」

「……なぜ、それを俺に言うんだ？」

「貴方なら現状を打破してくれそうだと思ったからです。いい方向でもいい。悪い方向でもいい。きつと何か変えられると思いました」

「買い被りだ」

「正当評価ですよ」

ポピーは顔を上げて笑った。

「貴方が来たとき、何か変えられるんじゃないかと思ったのは本当です。政治的理由なんて関係ない。貴方を此処へ留めたのは、僕の我儘エゴです」

「でも、おかしいですね。こんなことを話すつもりじゃなかったんですけど」

照れくさそうに少年は笑った。

少し綻べば、流れ出すのは簡単だったのだろう。ずっと抱えていた悩みが、苦しみを吐き出したようだった。

3年間、長かっただろう。

俺は器用な慰めの言葉など持たないから、ただこうして懺悔を聞

いてやることしかできない。それ以上に罪深い自分が、ポピーに言葉をかけて資格などありはしない。

だから、ただ、思う事だけを口にした。

「もしこの城の皆が落胆しているならとうに見放しているはずだが、此処には多くの人が残っている。みな、落胆などしていない。きつとお前と同じ気持ちのはずだ」

俺は少しだけ城の者の気持ちが分かる気がした。

虚勢を張った幼い子らの精一杯を否定することなどではしなかったのだろう。ただ、いつか訪れるこの時に、助けられるように静かに傍に仕えたい。

きつと、この二人を知る者ならば皆そう思うはずだ。

ただ惜しむらくは、その行いを止める者がいなかったこと。

それを聞いたポピーは、泣きそうな顔をして笑った。

「貴方は不思議な方ですね。どうしてそんなことが断言できるのですか。会ったこともない相手でしょう？ あえて僕ら以外、この城で誰にも会わせなかったんですから。それなのに 貴方にそんな風に言われたら、本当にそんな気がしてきてしまうのは何故でしょうね」

返答に困っていると、ポピーはぼつりと呟いた。

「到底、敵う気がしません」

「何がだ」

「秘密です」

首を傾げると、ふふ、とポピーは笑った。

「僕も、貴方のような導き手が欲しかった」

聞き覚えのある台詞に、思わず唇の端が上がる。

俺も、あなたみたいなお兄さんがいたらよかったな

そう言ったレメゲトンの少年は、今や革命軍の幹部候補として名乗りを上げている。

「4年前に、同じことを言ったヤツを知っている」
きつとこの少年も大丈夫だ。

ライディーンと同じ、困難を乗り越えて、さらに成長する力を持っている。

「本当に、貴方は変わった方だ」

ポースポア、『光草』^{ひかりくさ}の名を持つ少年は、そう言ってもう一度笑った。

「さて、本当に話したかったのはこの事じゃないんです。何故でしょうね、大会が終わるまでは隠しておこうと思っていたのに、全部話してしまいました」

「勝手に話したのはそっちだろう」

言い返すと、さらにくすくすと笑い声が追ってきた。

「それだけの運命を背負って、それだけの人生を歩んできて。当たり前のように人を諭すのに、ひどく子供っぽいんですね。だからいろいろと話しやすいのかもしれない」

まさか10も年下の少年に子供っぽいなどと言われる日がこようとは。

しかしながら、あまりにストレートな物言いに、失礼だと怒る気力も起きなかった。というよりも、こちらがこの少年の地の性格なのだろう。

この物言いにしてしまった原因は自分の方にもありそうだ 全

く、身に覚えのない嫌疑だが。

「で、何の話をするつもりだったんだ？」

「ミス・グリフィスの話です」

「?!」

思わず目が覚めた。

「少し前の話になります。そうですね、ちょうどクロウリー伯爵がミリアの結界内にいた頃の話です。この居城全体を包んでいるミリアの結果が一部破られ、何者かの侵入を許しました。侵入と言っても物理体ではなく精神体なんですけれど……そう、『遠く離れた場所から城内を見たり、聞いたり、気配を感じ取ったり』……平たく言えばそついう事です」

遠く離れた場所から。

俺はその能力をよく知っている。

まさか、あいつが？

「しかしながら、気配の残滓は天使のものでした。それも、まるで僕らにわざと分かるように遺して行ったかのように不自然に。僕らも解析しようとしたのですが、僕もミリアは探索能力に優れたオリユンポスではありません。なので、アーデインに頼んだんです」

「アーデイン……あいつは天使の力を使えるのか？」

「言つと怒るんですけどね。探索能力は僕らの比較になりません。時折、こつそりお手伝いしていただくんです」

筆頭医師のアーデイン。啞え煙草の不良医師。気配から天使の力を継いでいることは分かっているが、それ以外の素性は全く知れない。

「アーデインが見た処に依りますと、気配は残っていないが、破られた感覚で『二人いた』ということです。天使の気配が、もう一人の気配を完全に消去していったようです。その天使というのがどうやらアノヒトで、アーデインの機嫌が悪くつて。それ以上は詳しく聞けませんでした」

「孤高の伝道師か？」

「はい」

孤高の伝道師『ウリエル』。俺がリユケイオンに飛び込んだ際になぜか助けてくれた天使の名だ。あの天使も何が目的なのかよくわからない。アーデインとウリエルのつながりも正直よくわからない。おそらくは、俺とマルコシアスのような関係だと思っただが。

分からないことだらけだ。とりあえずこの問題は置いておこう。

「いずれにせよミス・グリフィスが」と、既婚者への敬称としてはふさわしくありませんでしたね。ミス・グリフィス？ いえ、ミス・クロウリーでしょうか」

「俺がクロウリー『伯爵』ならばあいつはグリフィス『女爵』だ」

「ではそう呼びしましょう。いずれにせよ、グリフィス女爵がリ

ユケイオンに入った可能性は高いでしょう」

「……そうか」

「それからもう一つ、決定的な情報があります」

「何だ？」

「『歌劇団ガリゾント』」

ポピーが告げた名に、どきりとした。

嫌ほど聞き覚えのあるその名は、あのくそガキを託してきたモリとルウナーの楽団の名だ。

「発祥は大国ケルトの歌劇団ですが、今は旅団として活動しているようです。その歌劇団が先日、セフィロト国からリユケイオンへ入国しました。そして今、この街で最も大きな劇場で公演を行っている。演目は『リオート』シス』アデーンの生涯』。珍しいケルトからの旅団ということもあって、連日満員です。音楽も素晴らしいのですが、特に役者陣の評価が高いようです」

心臓の音が耳元で鳴り響いている。

「主役を演じているのは歌姫のルウナー』ミタール。サヴァール將軍役はグリック』ロンド。悪鬼ロキ役にフェリス』ハウンド。豊穰神フレイに客演のヤコブ』ファヌエル。それから、戦女神フレイアには同じく客演のグレイシャー』ロータス」

「！」

もう、疑う余地はなかった。

全身から力が抜けた。

あいつがリユケイオンにいる。それだけでもう十分だった。

「ルウナー』ミタールとグレイシャー』グリフィスの人気は凄まじいですよ。ほんの何週間かで、この街でその名を知らぬ者の方が少なくなりました。グリフィス女爵はともお綺麗な方らしいですね」

「……ただの鳥頭の阿呆だ」

どうにも返答のしようがなく、そう答えると、ポピーはくすくすと笑った。

「ルウナー』ミタールとグレイシャー』グリフィスの二人は今回の

武道大会の『踊り子』審査にも出場する予定のようですよ」

「踊り子審査？」

「武道大会では毎年、神前舞踏と呼ばれる儀式を行います。実際の武道大会を開催する前に、軍神アレスに対してこれから行う大会を見守ってくれるようにと祈りを捧げるための舞踊です。選ばれた3名の『踊り子』たちが剣舞を披露する、というものです」

踊り子。あの歌姫ならともかく、あのくそガキが踊り子……？

どうにも想像できず首を傾げていると、ポピーはくすくすと笑った。

「あと3日もすれば本格的に審査が始まります。勿論、その様子をご覧になることはできますよ？」

「……考えておく」

ポピーはソファから立ち上がり、盆を手にした。

「そろそろお暇しますね。」

部屋の扉を開けるとところで振り返り、柔らかく微笑んだ。

「よい夢を」

ぱたん、と扉の閉じる音。

確かに、よく眠れそうだ。

胸の中に灯った安堵を抱え、床に向かった。

あいつが生きて、この地にいる。それだけで十分だった。

そのせいで、役者の中に不穏な名前が混じっていたのも完全に聞き落としていた。

SECT・4 アーディン

赤髪の少女、ミリアリユコス「エリユトロン。彼女が本当の『軍神アレス』であるという。3年前に東の戦で前任の軍神アレスを務めた父親を亡くしている。その時に、軍神アレスの力を継承したのだという。

いったいどういう経緯かはわからないが、その戦で傷を負った東方の民を一人連れ帰り、新たな『軍神アレス』であると公表した。ミリアの感情は分からないでもない。しかし、目の前に対峙する男が、いったい何を考えて此処にいるのかはわからなかった。

未だ芥子の毒に苦しみ、逃れえぬのかもしれないし、他に何か理由があるのかもしれない。

俺は目の前の赤髪の男を見ながら、昨晚のポピーとの会話を思い出していた

いかんせんこの男は無口で、単語ひとつ口にしらないのだ。憶測すらできない。

今日もただ無言で剣を合わせる。

東方の剣術と手合せする機会などそうあるはずもないので、その時間が稀有なものであることは分かっていたが、詮索が心を占めるのも事実だ。

気を削いでいると、すぐに一本取られてしまう。

現在のところ、客観的に見て実力は拮抗している。10日後に行われる演武でどちらが勝つかは正直分からない。

「休憩しよう」

剣をおろしてそう告げると、男は目礼して壁際に下がった。

その間、口を開きもしない。

もはや無口というレベルではない。

何か理由があるのだろうか。

あのくそガキなら何も考えずに本人に聞くに違いないが、そういうわけにもいかないだろう。

と、そこへミリアが医者のアーディンを引き連れてやってきた。アーディンの方は診察時間として、ミリアはいつたい何をしに来たんだ？

しかも、壁際に佇む軍神アレスには目もくれず、まっすぐ俺の方に向かってくる。

「……何か用か？」

牽制に放った言葉も無視し、ずかずかと間合いまで踏み込んできた彼女は、真下から俺を見上げて言い放った。

「お前、『踊り子』試験の開幕に立ち会え」

「……は？」

「今回の大会で特別招待客のお前は軍神アレスと演武を行うと既に公表したのだから、事実を裏付けるために人前に出てもらう」

いきなり何を言っているんだ、こいつは。

思わず眉間に皺を寄せてしまった。

面倒な事になった。こいつはまだ俺の事を自分の所有物だと勘違いしているらしい。

「何を訳の分からん事を言っている。俺がお前の命令を聞かねばならない理由でもあるのか？」

言い返すと、ミリアは挑発するようにやりと笑った。

「グレイシャー＝ロータス」

彼女の口から出た名前に、俺は閉口した。

「知った名だろう？ 今回の『踊り子』試験の参加者だ。かなりガキくさいやつだったな」

確かにあいつは鳥頭で阿呆だが。

この物言い。

ミリアはあいつに会ったのか？

「あんま年上の男をからかうもんじゃねえよ、ミリア。とくにこいつはガキ臭えんだから」

啞え煙草のアーデインが窘めた。

ポピーといいアーデインといい、ここではガキ扱いされてばかりだ。おかしい。いつもなら隣にいつががいるから、俺が子ども扱いなんぞされることはないはずなのに。

「お前に選択権はない。これは命令だ。3日後の審査初日、アレスと一緒に舞台に立て。それだけでいい。詳しいことはブロンデンから説明させる。分かったな？」

きっぱりと言い切ったミリアは、俺の返答を待たずに踵を返し、部屋を出て行った。

突然の出来事が理解できず呆けていたのだが、アーデインに目の前で手をひらひらと振られ、はっと気づいた。

「ほれ、手、出せ。あと右足もだ。ほぼ完治してるが、無茶すれば10日後の大会に間に合わねえぜ？」

そうして、啞え煙草の不良医師は、気にせず日課の診察を始めた。煙が目の前に立ち上ってくる。

煙と共に、ヒトならざるモノの気配も強まっている。

「おい、医者」

「何だ、悪魔」

「その理屈でいくとお前は天使か」

思わず言い返すと、アーデインはふいにこちらを見上げた。

感情の読めない褐色の瞳にどきりとする。

「それは禁句だ、クローリー伯爵」

「だが事実なんだろう？ 隠す気もなさそうに見えるのだが」

「俺の気配に気づける人間は国中探しても12人しかいねえよ。12人と面識あるし、俺に害意がないことは証明済み。あとはセフィロトなら10人、グリモワールなら72人……いや、今は2人なのか？ アンタみたいない例外相手に、隠す意味なぞ微塵もねえ」

「……グリモワールは6人だ」

俺たちの他に、ライディーン、ヴァイヤー老師、アリギエリ女爵、メイザース侯爵の4人がいる。アリギエリ女爵はミュレク殿下のも

とに留まり、ヴァイヤー老師は俺たちの子を預かる義兄上の近くにライディーンは革命軍の実働部隊として国中を忙しく飛び回っていた。

現在のところ、所在が知れないのはメイザース侯爵のみだ。

セフィロト国軍によって王都ユダが制圧された際、行方をくらましたと聞いた。それ以来、メイザース侯爵の安否は知れない。

「そう簡単に身内の情報漏洩していいのかよ」

「お前が聞いたんだらう」

「答える義理はねえだろ。ちつとは用心しろよ」

何故か理不尽に叱られた。

この医者としやべっているとどうにも調子が狂う。

「まあ、治りは順調だ。この分なら演武に支障はねえだろ」

いつものように、煙草を床に落として踏み消して 稽古場に煙

草を落としていくのをやめろ、と最初の三日は言い続けたが、全く聞かないので諦めている。

後で片付けよう。

と、この日は珍しく、アーディンが二本目の煙草に火を点けた。

ああ、片付けが増える、と思っていると、アーディンはこれまた珍しく真剣な顔をしてぼつりと言った。

「なあ、アンタ。自分の中の血を煩わしく思ったことはあるか？」

唐突な質問だった。

普通の人間には意味を為さないが、俺とこの医者の間に限っては特別な意味を持っていた。

そして、答えは簡単だ。

「ある」

即答したことに、啞え煙草の医師は驚いたようだ。

「意外だな。その血のお陰で民衆に崇められてんだから、喜んでるもんだと思ってたぜ」

「確かにそういった面もあるかもしれないな。だがそれは理由にならない」

生を受けてすぐ、自分の血が原因で母を亡くした。その上、クローリー家に引き取られることになった。そして、堅牢な悪魔耐性を持つが故、レメゲトンに就任し騎士の道を断たれた。

何より、この血がある限りにおいて、俺はあいつと戦う運命にある。

「だが、マルコシアスの事は尊敬しているし、この血は誇りだ」
「臭いセリフだ」

確かにその通りかもしれない。

しかし、この感情を言葉にするには、俺は口下手すぎる。

剣の師匠であり、生死を共にした戦友であり、先祖であり、父親であるマルコシアスに対する感情は、どんな言葉にも替えがたかった。

「そのマルコシアスのせいで、力が顕在化して暴走してもか？」

アーデインの褐色の瞳に冷たい光が灯った。

「……その時は、あいつが止めてくれるだろう」

俺が何もかもを破壊する前に、容赦ない牙で以て俺の息の根を止めればいい。

ほとんど願望に近い推測だった。

「あいつつてのはグリフィスの生き残りの事か？」

「ああ」

「信頼してんだね、美しいもんだ。いや、ガキなのか？」

鼻で笑ったアーデインは、二本目の煙草を床に落とした。

「言つとくが、芥子はきつかけでしかねえ。アンタの中の悪魔は確実に表に出かかっている。それだけは覚えとけ」

「……それが分かるのは、天使の力か？」

不覚にも口をついた言葉に、アーデインの空気が変わった。

あからさまに不快そうな顔をし、舌打ちした。

「これだから悪魔は……」

煙草を取り出し、三本目。

そういえば、アーデインはウリエルが嫌いだ、とポピーが言って

いたな。

少しばかり不躓な質問だったか、と思ったが、よく考えればアーデインの不遜な態度の方がよっぽど不躓だ。謝る気はない。

「あいつが城内に進入した時に解析したのもお前だと聞いた。探知能力に優れているようだな」

「アンタ、俺が嫌がってるのが分かってて続けてんのか？」

「無論だ。普段お前がやっていることだろう？」

と、そこでアーデインは目を丸くした。

「なんだ、気にしてたのか。そんでこれは、仕返しだったのか？」

「そうだ」

少しは反省するべきだ　と、言う前にアーデインは次の瞬間には腹を抱えて笑いだしていた。

「いったいなんだというんだ。」

「思わず眉間に皺が寄る。」

「いやあ、ガキだガキだと思ってはいたが、まさか仕返し、とはなあ。アンタ、マジで面白ええな。だからミリアが懐くのか？」

涙を滲ませながら身をよじったアーデイン。

「悪魔騎士で、元伯爵で、貴族で、マルコシアスの子で、セフィロト国から指名手配されてて、こんだけの容姿で、無愛想のくせに、それはねえだろ！」

「……」

相変わらず失礼な奴だ。

「真面目で面倒なお堅いヤツかと思いきや、とんだド天然だ。これ反則じゃねえの?!」

肩で息をしながらぼんぼんと俺の肩を叩いた。

「アンタの嫁の気持ちかわからなくもねえな」

「はあ？」

意味不明な台詞に、思わず不機嫌な声が出た。

「が、アーデインは気にしないようだ。」

当たり前だ。この不良医師は俺が不機嫌だからと言って態度を改

めたりしない。

「あー笑った笑った」

ひとしきり笑った後、啜え煙草の医者俺を見上げてにいつと笑った。

「俺、アンタのこと嫌いじゃないぜ。会うまでは心の底から嫌いだったけどな」

「……既視感のある台詞を吐くな」

それは戦争の時に、ライディーンが俺に言った台詞と同じだった。「アンタは人がおおよそ欲しいと思うモンをだいたい持つてるからな。妬まれるんだよ。だが、実際会ったらコレだ。そりゃあ、この台詞を言いたいのは俺だけじゃないと思うぜ？」

どういう事だ。

眉を寄せていると、アーディンは三本目の煙草を床に落として火を踏み消した。

「じゃあな、明日、同じ時間に来るぜ。無理すんじゃないぞ、アレイ」

ひらひらと手を振りながら。

三本の煙草を床に残し、気まぐれな医者は去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122u/>

ASCENDANT PRELUDE -tail-

2011年10月3日03時23分発行